

自主調査研究報告 [完了報告]

水産物陸上保管施設と高鮮度な船舶輸送に関する研究(継1A-1-④)	大分類	継1A
	中分類	継1A-1

1. 目 的

北海道の水産業は、環境変化に伴う漁獲量の減少や、トラックドライバー不足からくる物流環境の悪化などの問題から、水産物供給体制に変化が求められている。

また、水産物需要が高まる中で高付加価値化を図り稼ぐ地域となるためには、主要港での陸上保管施設の整備が重要と考えられている。

このような背景を踏まえ、本研究では、水産物の高付加価値化や国内外の販路の多様化を図り、北海道が地域資源で稼ぐ地域となるため、苫小牧港をモデルとして水産物の出荷調整、出荷や輸送の平準化、高鮮度で長期輸送するための方法を検討する。

最終目標は、その結果を公表して、水産物の陸送面で不利な地域や、販路の多様化などを考える地域において、近隣の港湾や漁港に陸上保管施設整備のニーズを創出する。

2. 実施内容

H29年度は、以下の内容を実施した。

- ①想定される水産物保管施設の機能や規模の検討を行った。
- ②高鮮度で長期の船舶輸送が可能になることによる効果の検討を行った。

3. 主要な結論

本年度の研究では以下の結論を得た。

- ①水産物保管施設の検討では、苫小牧漁協で保有する施設(畜養タンク)を参考に、マツカワカレイ及びホッキ貝の保管に適した機能や規模を検討した。
- ②高鮮度で長期の船舶輸送の検討では、水槽内でホッキ貝を異なる条件で飼育し、輸送コンテナ内におけるホッキ貝の管理条件を室内実験により把握した。この結果、海水の違い(深層水、表層海水、滅菌海水、人工海水)ではいずれもホッキ貝の活力度に問題がないこと、輸送時期(季節)の違いでは産卵期前(11月)が最も身痩せが低く海上輸送に適することを明らかにした。

4. 今後の対応

H27~29年度の3か年にわたり実施してきた本研究は、これまでに得られた成果や課題を整理し、CPC調査研究報告として本年7月に刊行した。

なお、本研究の実施過程においては、研究成果の一部を各種学会等で発表してきており、下記の論文については第33回寒地技術シンポジウム(H29年12月)にて前年度発表の優秀論文として寒地技術賞(産業部門)を受賞した。
・松尾優子、岩波俊介、阿部島蘭、田中淳、片石温美：マツカワカレイの活輸送方法に関する実験的研究、第32回寒地技術シンポジウム、平成28年11月